

一橋大学審査学位論文

「復帰」への否（ノン）  
—戦後沖縄における統治と抵抗—

一橋大学大学院言語社会研究科

LD131016

松田 潤

## 要旨

本論文は、反復帰・反国家論の分析を軸に、それだけには限定できない戦後沖縄における「復帰」への抵抗の複数性と、抵抗の可能性の条件となる権力の発動形態について、統治の観点から考察を試みた。序章では、本論文における「復帰」と「反復帰」の定義を確認し、研究の枠組みを提示して先行研究批評を行った。本論文において「復帰」とは、反復帰論を唱導した新川明が述べているように、一九七二年の施政権返還をもって完了してしまう制度的な区切りのことではなく、沖縄の人びとが持っている本土思考と国家への同化主義のことである。本論文においても、反復帰論の視座において「復帰」を日々の「復帰」化＝国民化という未了の事態として捉え、それへの抵抗が今なお現在性を持ち続けている思想的課題であるということを確認した。その上で、「復帰」への抵抗の複数性を示すために、戦後沖縄における「復帰」批判の契機とされる一九六八年の夏に行われた「沖縄にとって「本土」とは何か」と題された討論と、「復帰」後三〇年目に行われた「復帰三〇年」を引き裂く」という討論を検討した。前者の討論では、「復帰」批判を行った人々だけでなく、特に「復帰」運動に可能性を見出そうとしていた側の発話の矛盾や恐れに着目した。それによって、「復帰」言説の只中に国民主義批判や植民地主義批判の回路が生成され、また共同体の感性のあり方をフレーミングする「戦争の枠組」自体を枠づける批判的思考が生み出されていたことを明らかにすることができた。後者の討論では、「復帰」ではなく「島ぐるみ闘争」を戦後の分岐点に据えることの重要性が主張されていた。これを受け、近年の沖縄戦後史研究領域では新崎盛暉による「島ぐるみ闘争」を中心とした歴史観が刷新され、沖縄戦後史像が再構築されていることを確認した。それらを踏まえ、本論文では「復帰」に抵抗するさまざまなレベルにおける出来事を偏在する分岐点として歴史化し、「島ぐるみ」という幻想をも解体しながら「復帰」を相対化し批判していくことを目的とすると述べた。

第一章では、戦後沖縄においてどのような権力の効果として国内にいながら「難民」が生産されていったのかという問いを出発点に、国民国家と主権の関係を問い直した。国民国家は主権をどのように放棄していくか、そして国家主権とは異なる権力によってどのように「難民」が再生産されているのかを明らかにするために、まず主権概念の形成について、エティエンヌ・バリバルによるカール・シュミットの批判的読解を参照し、それをジャック・デリダの主権論と結びつけて論じた。バリバルとデリダの提起は、人民と主権の結びつきを性急に切断するのではなく、転移的運動を有する敵対関係や無条件性に基づく批判的な交渉を通じて国家の主権と対峙し続けることであった。次に近年シュミットの主権論を継承しながらそれをミシェル・フーコーの生政治の議論へと接続させることで主権権力の枠内において行使される暴力の問題を論じたジョルジョ・アガンベンを議論を検討した。アガンベンは「剥き出しの生」という例外の常態化として生政治を理解しているが、それに対してジュディス・バトラーが批判するように、主権はもはや、追放された生がどつぷりと浸かっている権力の様態を説明するには不十分である。よって次に、主権とは異なる統治形

態を見出すためにミシェル・フーコーの統治性について考察した。本論文では、統治のあり方が国家理性 - ポリスの統治から自由主義の統治へと変容していったと論じるなかで、フーコーが間違いなく意識はしながら抑制的にしか語らない主題が植民地と帝国主義の問題であるとし、自由主義的統治が依然として国際世界とその外部の区分を維持し続ける帝国的原理の遺制によって可能になっていると論じた。

第二章では、反復帰・反国家論を中心的に展開してきた新川明と川満信一の議論を、独立論やナショナリズムに回収させることなく読む可能性について考察した。新川らの反復帰論が依拠する沖縄の「異族」「異質性」というモチーフは、同時代の批評や先行研究によって多くの批判がなされてきた。本論もその視座を引き継ぎ、両者の反復帰論を批判的に再読したことで明らかになったのは、彼ら自身の議論のうちにナショナリズムを乗り越え批判する視点が含意されているということであった。その鍵となるのは、反復帰を主張する根拠としての「非国民」という主体ならざる主体である。それは川満にとっては「集団自決」の死者や未来に死を先取りされた生の「死者的立場」であり、新川にとってはアナキズムの思想を経由して獲得された「個の位相」、「狂気」、さらに国家を内側から腐食させる「壊疽」というメタファであった。そのような「非国民」という存在に「転移」や「増殖」という運動性を介して「なる」こととは、ドゥルーズ＝ガタリのいう〈マイナー〉な存在への生成変化であったと考えられる。

第三章では、『琉大文学』（一九五六年創刊）第一期の新川らの採用した社会主義リアリズムを徹底的に批判し、一九六〇年世代にシュルレアリスムに傾倒していった清田政信（『琉大文学』第二期）の詩と思想を考察した。清田に代表される一九六〇年世代は、『琉大文学』に所属しながらも一九六二年『詩・現実』を創刊して、アバンギャルド芸術としてのシュルレアリスムを再検討し、リアリズムの内的深化をはかろうとした。清田の詩的言語の実践が目指していたのは、「存在」とは異なる「非在」というイメージを表出することであった。清田は六〇年代末心身の療養のため故郷の久米島に帰省していた間、詩を一切書いていなかった。三年の詩の絶筆を経て「復帰」前後に書かれまとめられた第三詩集『眠りの刑苦』は、失語や沈黙と向き合ったことで、日本語と沖縄方言の相互規定的な結びつきを切断していく詩的实践へと結実していった。さらに清田が同時期の詩論において理論化した「爽快な責任の論理」を内在化する「個人性」という概念について、「共同体の不在」のみを共有する非主体的な主体の場であり、久米島事件の「戦死者」たちとの連帯の場であったと位置づけた。

第四章では、引き続き清田政信の詩と思想を扱った。本章において課題となるのは清田における時間性についてである。清田の詩および詩論では、「朝」という時間が人や事物の形が溶解し変容し始める特権的な時間として設定されていた。清田の詩的言語における「遠い朝」とは、一九六〇年代初頭の沖縄で、主題を失い主体になり損ねた者たちが「オブジェ」へと変容を遂げ、「暗いエネルギー」と呼ばれる動物の感情にも似たネガティブな情動を鬱積させるしかない時間のことであった。清田の詩的時実践が問うているのは、暗い情動や言

話のアレゴリカルな時間性やグロテスクな形象を媒介に動物や死者たちの「帯域」へと歩み寄り、死を回避して生きていくことであった。清田の晦渋な詩的言語が手練り寄せようとするこの思いがけないほど単純な——しかし決して容易でない——願いは、「人間的なもの」に限られない生が生き延びること、ひいては「生存可能性の諸条件を再考すること」（バトラー）を私たちに促しているのである。

第五章では、「祖国復帰」運動に極めて早い段階で批判を示し、「反復帰論的思想」を涵養していた琉大マルクス主義研究会とその活動の基盤になっていた琉大学生新聞部、そしてそれらに属して活動した後に自殺した中屋幸吉のテキストを考察した。マル研と新聞部の特徴は以下の四つに要約的できる。(一) 既成左翼=日本共産党と一体化していった人民党からの離脱と復帰「運動」批判、(二) 米軍統治下における大学当局の検閲／監視への抵抗、(三) 日本本土の新左翼（共産主義者同盟＝ブント）への共鳴と理論的依拠（日帝自立論と行動的ラジカリズム）、(四) インターナショナリズムへの傾斜。「復帰」への批判は政治的運動としてよりも、中屋に見られるように個々の内面において深められていったと言える。そして中屋が自ら「思想の転機」と呼んでいる宮森小ジェット機墜落事件による姪の死に続き、憧れの「祖国日本」への四〇日間に及ぶ旅とそこでの日本への幻滅を「二度目の思想の転機」として位置付け、政治闘争に挫折していくなかで紡いだ詩の言葉に、主体の変容と新たな生への転生の可能性を見出した。

第六章では、米軍占領下における「外国人」問題を、施政権返還目前の沖縄を舞台に底辺労働者たちのストライキを描いた阿嘉誠一郎の小説『世の中や（ゆんなかや）』（一九七五年）を取り上げ考察した。『世の中や』は施政権返還目前の基地経済体制の変動における擬似的階級体制下の労働環境と、第四種雇用というストライキの権利も認められていない劣悪な労働環境で働く軍雇用員たち、そして「外国人」に焦点を当てたことで、従来米国—日本—沖縄という垂直的・対立的な構図で説明されてきた沖縄返還問題および米軍占領下沖縄の植民地状況を、底辺に生きる人々の視座から相対化して捉え直す作品であった。人種、ネイション、階級、ジェンダーの分断を描くことを通して、本作は、存在の底辺から人間性そのものを問い直す契機を与えるものであった。さらに本作は、はポストコロニアルな状況の現代の沖縄にも通じる労働力化と「民族」化の桎梏の乗り越えを、決して実体化された外部ではない「外部性」とも言うべき境界において志向し続けることで試みていると分析した。

終章では、各章の総括と今後の展望を述べ、本論文では取り上げることのできなかった映像作品について、高嶺剛の作品に予備的に言及して論を閉じた。本論文の課題の第一は、主権権力から自由主義的な統治性権力への移行を理論的に跡づけることはできたが、今後はより具体的に事例や作品に即して戦後沖縄における統治性のあり方とそれへの抵抗を考察する必要がある。第二に、本論文では「復帰」への抵抗と米軍統治のあり方を主題とし考察したが、それだけでは十分に説明できない権力の様態を分析する必要がある。具体的には、被支配者側からの反応を「復帰」への抵抗として描き出し、権力の様態を統治性の観点から分析するだけでは、支配者の側の言説や表象については考察が不十分である。ゆえに、今後

は一九九〇年代に隆盛したポストコロニアル理論を批判的に再検討する研究を踏まえ、植民者や支配者の側の身体や発話、情動、およびその表象なども分析の対象とする必要がある。三つ目は、本論文では戦後沖縄における映像作品について言及できなかった点である。今後研究を進めていく予定であるが、終章ではそのためのノートとして高嶺作品における音の自律と時間イメージについて論じた。